

保育者養成課程在籍者の基礎的音楽理論の理解と 伴奏技能及び音楽経験についての調査

平松 愛子 井上 幸一*

A Research on the Basic Musical Theory,
Skill of Accompaniment and Music Experiences
for the Students in a Nursery Training Course

Aiko Hiramatsu Kouichi Inoueh*

Abstract

This research is about the correlation among basic musical theory, skill of accompaniment, and music experiences for the students who take a nursery training course.

First, we checked the students' status of understanding of basic musical theory, level of piano accompaniment skills, and individual music experiences. We obtained the status of understanding of basic musical theory through the test of music intervals, scale keys, beats, chords and words. For the music skills and experiences, the students participated in paper surveys. Based on these results, We considered the correlation among ethical understanding of music elements, musical skills, and experiences.

Key words : Basic Musical Theory, Skill of Accompaniment, Music Experience

*福岡女子短期大学（福岡県太宰府市）

1. はじめに

音楽表現に関わる内容は、平成21年度に施行された「保育所保育指針」¹⁾において、「教育に関わるねらい及び内容」の「表現」領域のひとつに位置づけられている。同指針の第3章 保育の内容 オ表現(ア)では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という目標が定められ、そのねらいとして「いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ」「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」が挙げられている。特に音楽に関する内容としては、(イ)内容において「保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ」がある。ここで述べられた「歌う」「手遊び」「リズムに合わせて体を動かす」という3つの活動を子どもの発達過程における効果的な活動とするためには、状況に応じた適切な音楽（伴奏など）の提供が必要となる。これらの活動には、聴覚だけでなく、发声と呼吸、リズム感、音程感や、手指・上下肢・体幹の運動など様々な要素が含まれる。さらに同指針の(イ)内容⑧では、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」と述べられており、保育士等が心地よい音色や情緒が安定する音楽を子どもたちに触れさせ、音への関心や音楽への親しみを持たせることの重要性が指摘されている²⁾。一連の音楽に関する諸活動は、他者との交流、コミュニケーション、自己表現の経験につながるものであり、それを可能にするためには、相応の環境設定についての配慮が必要である。

子どもとともに「歌う」「手遊び」「リズムに合わせて体を動かす」活動を行い、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」ためには、伴奏技能（音楽能力）とそれを下支えする基礎的な音楽理論への理解及び音楽経験が必要である。そこで、筆者らは、保育者養成課程に在籍する学生を対象として基礎的な音楽理論の理解及び音楽経験に関するアンケート調査を実施することとした。

本報告は、このアンケート調査の結果を紹介し、この結果から導かれる音楽経験と音楽理論の理解度との関連性について述べるものである。

2. 調査方法

(1) 対象及び調査時期

アンケート調査の対象は、本学（近畿大学九州短期大学）保育科に在籍する学生 139 名（1年生 77 名、2年生 62 名）と福岡女子短期大学保育学科に在籍する学生 162 名（1年生 99 名、2年生 63 名）の計 301 名である。

調査時期は両校ともに平成 27 年 5 月～6 月である。統計処理には Microsoft Office Excel 2007 を用いた。調査の設問は、[I] 基礎的音楽理論についてのテストと [II] 伴奏技能及び音楽経験についてのアンケートの 2 項目とし、具体的なアンケート用紙のデザイン、項目設定等は筆者らが独自に作成したものを採用した。

(2) 基礎的音楽理論テスト

テスト問題は以下のとおりである。

- ① 音程 1オクターブ内の複数の音程を記入
- ② 調 調号と主音を提示し、調名を記入
- ③ 拍 小節内の音符の長さから何拍子かを記入
- ④ 和音 和音を提示し、コードネームを記入
- ⑤ 記号 強弱記号などを提示し、その意味を記入

(3) 伴奏技能及び音楽経験に関するアンケート調査

調査項目は以下のとおりである。

- ① 音楽経験 クラブ活動、音楽教室（義務教育以外の）などの内容・楽器名と開始時期
及び年数を記入
- ② 伴奏技能 コードネームを見て伴奏が可能かを記入
- ③ 練習時間 日常生活における練習時間（1週あたり）を記入
- ④ 音楽技能 自身の音楽技能に対する自信の有無について記入

3. 結果

(1) 基礎的音楽理論テストの結果

① 平均得点

テストの平均得点は表-1のとおりである。テストは100点満点とし、本学をA、他校をBとして記載している。（ ）内の数字は被験者数である。全被験者の平均得点は22.3点と非常に低く、全般的に音楽の論理的側面に対する理解の低さが示されたといえる。また、1年生の得点21.4点と2年生の得点の23.2点を比べると、2年生が大略2点程度高いという結果であった。

表-1 基礎的音楽理論テストの得点（100点満点）

	A校	B校	両校
1年生平均	15.1 (77)	27.6 (99)	21.4 (176)
2年生平均	22.3 (62)	24.1 (63)	23.2 (125)
両学年平均	18.1 (139)	26.1 (162)	22.3 (301)

（ ）内の数字は被験者数を示す。

② 項目別の平均得点

テスト結果の一例として、5つの項目（①音程、②調、③拍、④和音、⑤記号）毎に求めた全被験者の平均得点を図-1示す。各項目は20点配分であり、合計100点となる。⑤記

号（楽語）の得点が 12.2 点と最も高く、④和音の得点が 0.9 点と最も低いという結果であった。その他の①音程、②拍子、③調は、いずれも 5 点未満であった。

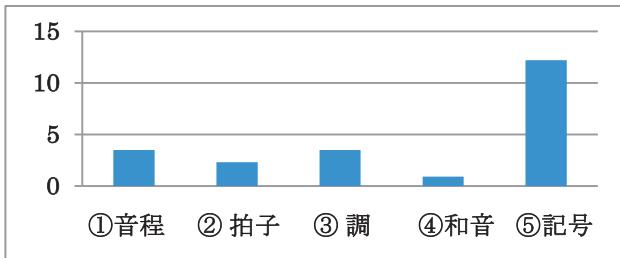


図-1 基礎的音楽理論テストにおける項目別の平均得点

(2) アンケート調査の結果

① 音楽経験

音楽経験の項目は、義務教育以外での音楽教室や吹奏楽、合唱などの経験の有無や経験期間を問うものである。結果は、図-2 に見る通り、義務教育以外の音楽経験者は、全被験者(301名)のうちの 170 名(56.5%)であった。さらに、音楽教室などにおける鍵盤楽器の経験者は全被験者の 50.5%(152名)であった。そして、鍵盤楽器経験者 152 名のうちの 65.8% (100名) は、5 年以上の音楽経験を有している者であった。なお、鍵盤楽器経験者の数は管楽器、合唱などを併せて経験している者の数も含んだ値である。

この調査結果は、両校の保育者養成課程に在籍する者の半数強が義務教育以外の何らかの音楽経験を有していることを示したものであり、興味深い印象であった。

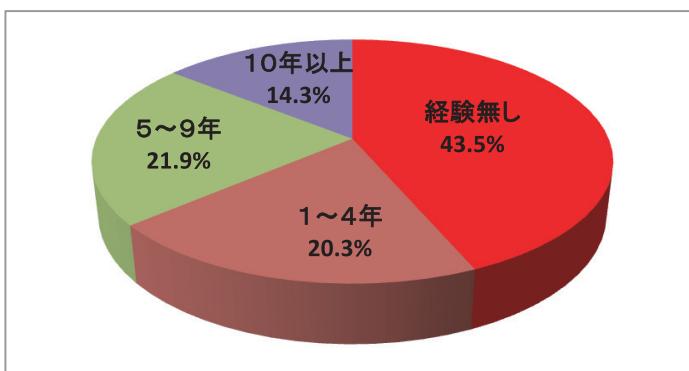


図-2 義務教育以外の音楽経験 (全被験者 301 名について)

② 伴奏技能

コードネームを見て伴奏ができると回答した者は 79 名で全被験者の 26.2% であった。このうち 84.8%(67 名)が義務教育以外の音楽経験者である。

③ 練習時間

全被験者の1週間の平均練習時間は1.5時間であった。また、義務教育以外の音楽経験者での平均は約2時間であり、未経験者での平均は約1時間であった。

④ 自身の音楽技能の自信

音楽技能に自信があると回答した者は全被験者の21.3%(64名)であった。そのうち義務教育以外の音楽経験者は、92.2%(59名)であった。

4. 考察

(1) 基礎的音楽理論の理解と音楽経験の関連

義務教育以外の音楽経験を有する者は、やはり未経験者に比べ基礎的音楽理論のテスト平均得点も高い結果であった。図-3に示すとおり、全被験者のうち、音楽経験(義務教育以外)の無い者の平均得点は12.2点であったが、音楽経験(義務教育以外)が1~4年で20.8点、さらに5年~9年で29.5点と経験年数に応じてテストの平均得点も高くなっていた。ちなみに、音楽経験(義務教育以外)が5年以上ある者についてのテストの平均得点は、35.3点であり音楽経験が5年未満(経験無しも含む)の者の平均得点は14.9点であった。

今回の調査により、図-3で見るよう音楽経験の有無や経験年数と音楽理論の理解との間には強い関連のあることが確かめられた。

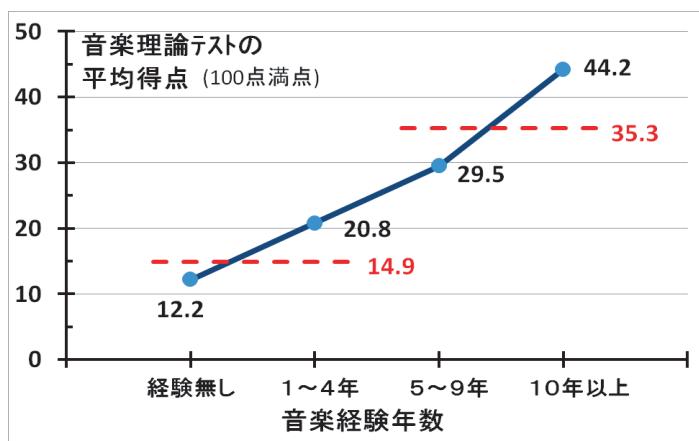


図-3 音楽理論テストの平均得点と義務教育以外の音楽経験年数の関係

テスト問題④和音は、コードネームに関する問であるが、これはアンケート調査②伴奏技能で問われている伴奏能力に直結するものである。義務教育においては、コードネームを学習する機会が一般に少ないものと思われ、これが得点の低かったことの原因であると

推察する。

また、⑤記号のテスト問題が他の項目と比較して高い得点となっていたが、この要因としては、①音程、②調、③拍子の問題を解答するには、一定水準の論理的理理解が必要であるのに対して⑤記号の問題は、ある程度の漠然としたイメージだけでも解答を推測できることが一因であったと推察する。

(2) 伴奏技能と諸要素の関連

アンケート調査の②でコードネームを見て伴奏ができると回答した者 79 名については、基礎的音楽理論テストの平均得点は 34.2 点であった。これは、全被験者の平均 23.3 点よりも 10 点以上高い得点である。また、音楽経験者 170 名の平均得点 30.1 点に比べると 4.1 点ほど高い値である。

練習時間の平均値については、義務教育以外の音楽経験を有する者が、ない者の約 2 倍の時間の練習を行っているという結果であった。このことから、入学後に伴奏技能の差異がさらに広がる可能性が高いと考えられる。ちなみに、コードネームを見て伴奏が可能と回答した者 79 名の内の 67 名 (84.8%) が、義務教育以外での音楽経験を有する者であった。

「保育者養成課程在籍者の音楽能力に関する調査」³⁾では、全般に音楽的知識・技能が不十分であること、さらに、入学以前の音楽学習経験の有無と基礎的音楽知識・能力との間に強い相関のあることが指摘されている。また、保育士を目指す短期大学学生の就職意識についての調査では、「ピアノを使う頻度が少ないこと」、「職場の人間関係が良いこと」などが就職先を決める主な要素であるとの報告がなされている⁴⁾。以上の文脈から、特に音楽経験が少ない学生は、伴奏（ピアノ）に対する苦手意識が強く、練習に対する意欲も低いため、これが、音楽経験の多い学生との練習時間の差異につながり、就職を決める段階、あるいは就職後における音楽技能の向上意欲に大きく影響するものと推察される。

また、日本版大学生調査 (JCIRP) の短大生調査 2009 年では、「短期大学では、人間関係を重視した教育が実施され、専門分野の知識、一般的な教養が密接に関連して学ばれているが、グローバルな能力や知識、数理的な能力の育成などについては苦戦している」⁵⁾と述べられている。音楽理論における音程、音階、調性、和音、拍及びリズムの学習には少なからず数理的な思考力、理解力が必須である。伴奏技能は、感覚的なトレーニングの積み重ねによって向上する技能であるとして捉えることもできるが、数理的・論理的な理解を必要とする基礎的音楽理論という下支えによって確かな技能が養われるものと考えられる。

伴奏技能を含む音楽技能及び表現能力が基礎的音楽理論の理解と関連すると考える場合には、基礎的音楽理論を学習させる課題も重要であるといえる。この点については、鍵盤楽器による伴奏のトレーニングと、これに併せて、基礎的な音楽理論を関連づけた学習も重要であると考えられる。伴奏する楽曲の構造やリズム、アーティキュレーション、和音進行などについて基礎的な分析を行いながら、練習をすることで、理論と技術の統合化が

促進されると考えられる。理論と技術の統合化が行われることにより、音楽的に豊かな表現を可能にし、子どもの豊かな感性や表現する力を養うことや、創造性を豊かにする活動に結びつくといえる。

また、子どもの発達過程や状況に応じた臨機応変な音楽の提示という視点からも、楽曲についての一定の理解と伴奏技能はその前提となるものである。

保育所指針において示された「歌う」「手遊び」「リズムに合わせて体を動かす」といった活動を効果的に実施するうえでは、伴奏のダイナミクス、テンポ⁹、アクセント、そして弾き歌いが重要な要素となり、状況によっては、移調奏が効果的な場合もある。また、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」については、音楽的なまとまり、フレーズ感、リズム構造の理解に基づく伴奏が必要となる。この点については、小中学校の音楽における表現及び鑑賞の2領域とそれを下支えする「共通事項」の概念に結びついていく基礎的な学習体験としても捉えられる^{6)、7)}。これらの音楽に関わる子どもの諸活動における経験は、音楽の知覚及び知覚的体制化に関わるものであり⁸⁾、発達段階における聴覚及び高次脳機能に関わる多様な能力の獲得としての意味をもつものと考えられる。

以上述べてきたように、子どもの感性、表現力、創造性等の育成に関わる音楽においては、伴奏技能が非常に重要な意味をもつものである。保育者養成課程在籍者には、この点を十分理解し、課程を修了する際には自信を持って伴奏が出来るまでの技能を身につけて欲しいと考えている。

今回実施した調査結果をこのような観点から眺めると、保育者養成課程在籍者の伴奏技能の水準及び差異に関わる要因としては、基礎的音楽理論の理解及び音楽経験の差異に関係していること、そして練習時間、意欲などの複数の要素が相互に連関していることが推察され、更なる調査・分析が必要であると痛感する。

5. 終わりに

「短期大学学生に関する調査研究 2014 年調査全体集計結果報告（参加短期大学数は 44 校、参加人数 12,093 名）」⁹⁾では、短大生の卒業後の進路について、回答数の多い項目として、保育・子ども系が 38%、医療・看護系が 15%、食・栄養系が 10%であると報告されている。さらに、学科分類に基づく分野別の在学生数では、保育・子ども系が 5,880 人 (44%)、教養・総合系が 2,029 人 (15%)、家政・生活系が 1,029 人 (8%) と報告されており、短期大学全般に占める保育・子ども系に在籍する学生の割合は高い現状であると云えよう。また、「幼稚園教育要領」¹⁰⁾に示されるように、保育士等に対しては養護、教育に関わる多様な専門的能力が求められており、この要請に応えるためにも保育者養成課程においては、表現の領域に関わる伴奏技能を含めた音楽技能及び知識獲得の向上が重要な課題の一つであると考える。全般的な数理に関わる能力の育成と基礎的音楽理論の理解との連関について

ての短期大学学生の現状は不明であるが、これも今後の検討課題としたい。

保育者養成課程においては、入学時における音楽能力及び知識の水準を把握し、特に音楽経験の少ない学生を対象として能力向上を目指す教育・支援は大きな課題であるといえる。本研究においては、伴奏技能と、それを下支えするであろう基礎的な音楽理論の理解及び音楽経験に焦点を当て、いくつかの可能性を示したが、諸要素の関連についてのエビデンスに踏み込んだとは言い難い。調査結果からは、義務教育以外の音楽経験を有する者は、未経験者に比べて音楽理論の理解、伴奏技能とともに、授業外における練習時間においても高い得点を示しており、2年間という学修期間において技能水準の差異がさらに広がり、卒業後の保育活動にも影響を及ぼすことを推測する。

以上のことから、今後は、正課教育における学習と授業外における実践的活動（自主練習やボランティア活動等）のラーニング・ブリッジング¹¹⁾、ラーニングアウトカム、トランジション（教育機関から社会への移行）¹²⁾の観点から、継続的に調査を実施し、保育者養成課程における学習と音楽技能及び知識の修得に関わる課題を明らかにしていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 厚生労働省(2008). 保育所指針
- 2) 厚生労働省(2008). 保育所指針解説
- 3) 三沢大樹(2014). 保育者養成課程の学生の音楽能力に関する基礎調査 全国大学音楽教育学会 研究紀要第25号
- 4) 田中浩二(2015). 保育士及び幼稚園教諭を目指す短期大学生の就職意識に関する調査研究 (1) — 短期大学生に対するアンケート調査をもとに 東京成徳短期大学紀要第48号
- 5) 相原総一郎(2011). 教育系短期大学の学習成果—I-E-O モデルの拡張と JJCSS2009 の分析 — 広島大学高等教育研究開発センター 大学論集 第43集
- 6) 文部科学省(2008). 小学校学習指導要領 音楽
- 7) 文部科学省(2008). 中学校学習指導要領 音楽
- 8) 水野伸子(2011). 幼児期における音楽理解の発達—「体制化」の過程—岐阜女子大学紀要 第40号
- 9) 一般財団法人短期大学基準協会調査研究委員会(2015). 短期大学学生に関する調査研究 -2014年調査全体集計結果報告-
- 10) 文部科学省(2008). 幼稚園教育要領
- 11) 河井亨(2012). 学生の学習と成長に対する授業外実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングの役割 日本教育工学会論文誌
- 12) 溝上慎一(2014). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂